

青年期の自立にかかわる諸問題 (4)

—大学生のナルシズム的傾向と性役割認知—

Psychological problems in relation to the independence of adolescence (4)

—The relation between narcissistic personality traits and sex-role concepts in college students—

永 江 誠 司
(Seiji Nagae)

The purposes of this study were to investigate the relationship between narcissistic personality traits and sex-role concepts in college students. The following results were found. Male and female students with higher scores in Narcissistic Personality Inventory (NPI) scale showed the type of androgynous sex-role (high masculinity and high femininity). Male and female subjects with lower scores in NPI indicated the type of indeterminate sex-role (low masculinity and low femininity). These results were discussed mainly from the viewpoint of such features of narcissistic personality as grandiosity, self-absorption, and idealism.

Key words : narcissistic personality trait, NPI, sex-role concept, androgynous sex-role, college student.

『S君は学校の成績も上位で、背も高くハンサム、クラスでも目立つ大学2年生だったが、ある時クラスの代議員の選挙に立候補したにもかかわらず落選して大いに傷ついた。S君は「クラスを代表するには、能力からも見てくれからも、自分がいちばん適しているはずだ。他の人間は自分の足元にもおよばない」と思っていた。しかし、S君の話聞いた彼の女友達は、彼のクラスの選択に同感してこういった。「たしかにあなたは背も高いし頭もいいかもしれない。でもあなたは、他の人になにかしてあげるとか、あたたかい気持ちで接してあげるといことが少ないよね。自慢が多くて、それを感心して聞いてあげたり誉めてあげたりするとご機嫌がいいけれど、今みたいにあなたを批判したりすると、とたんに不機嫌になって冷たくなるわ。あなたには、自分がいちばん大事で、他の人はなにかの目的に使う道具にすぎないのよ。それで、みんなにあまり人気がないのよ」と。選挙の落選で大いに傷ついたS君の心は、女友達のこの適切で率直な批評でさらに深く傷つき、ついにカウンセラーのもとを訪れるにいたったのである。』ナルシズムの人間を福島(1992)はこのように描いている。

ナルシズム(narcissism)あるいは自己愛という言葉は、私たちの社会でも日常的によく使われ

る言葉となっている。ナルシスト、自己愛人間と呼ばれる人たちが、社会の中で注目を集めることも多くなってきた(Lasch, 1979; Lowen, 1985; 中西, 1987; 小此木, 1981)。ナルシズムという語は、ギリシア神話に出てくるナルキッソスの物語に由来するものであり、Ellis (1898)が自体愛の症例を記述する際に最初に用いた語とされている。ナルキッソスの物語とは、次のようなものである。むかし、ギリシアにナルキッソスという美しい少年が住んでいた。彼は幼いときから多くのニンフたちの注目の的であった。しかし、ナルキッソスはニンフたちの愛を受け入れようとはせず、冷たくあしらっていた。そこで、ニンフの一人が復讐の女神ネメシスに次のように願った。ナルキッソスがだれかを愛し、しかもその愛が報われないようにと。ナルキッソスが狩りに出かけたある日、美しく澄んだ泉で水を飲もうとした。その時、水面に映った自分の姿を彼は見た。ナルキッソスはそれを水の精と思い込み、すっかり心を奪われてしまった。彼はそれから泉を離れることができず、やがて身体は痩せ衰え、ついにその身を滅ぼしてしまった。そして、そこには一輪の白い花が咲き残ったのである。その花はナルキッソス(水仙)と名づけられた。

ナルシズムを精神分析的観点から理論化し

たのは、Freud (1914) である。彼は、同性愛者の起源を「母親が自分を愛してくれたように、自分と似た若者を愛する心理」に置き、この「自分自身を性の対象とする心理」をナルシズムと呼んだのである。その後、彼はナルシズムを性の正常な発達段階における自体愛と対象愛の中間に位置づけ、ナルシズムを介して人は他者を愛しようになると仮定している(福島, 1986)。ナルシズムの精神分析学的研究は、その後、Kernberg (1975, 1980) や Kohut (1971, 1976) によって臨床的実践と理論化が進められてきている(上地・宮下, 1992a, b 参照)。

ところで、ナルシズムを心理検査や質問紙などによって客観的にとらえる心理測定論的観点からの研究も最近さかに行われるようになってきた。例えば、Exner (1969) と Harder (1979) はロールシャッハ・テストによって、あるいは Grayden (1958) と Harder (1979) は TAT によって、ナルシズムを測定する試みを行っている。また、Ashby, Lee, & Duke (1979) は、MMPI の 19 項目を用いて自己愛人格障害尺度 (NPDS) を作成している。さらに、Raskin & Hall (1979) は DSM-III の自己愛的人格障害の基準にしたがって自己愛人格目録 (Narcissistic Personality Inventory : NPI) を作成している。DSM-III によれば、自己愛人格障害は「自己の重要性やユニークさへの誇大感、際限のない成功や美貌などへの空想に対する執着、注目と讃美を求める自己顕示性、自己への批判や無感心に対する脅威反応、対人関係における特徴的な障害、例えば権利のみの主張、他者の利己的な利用、過剰な理想化と卑下との間で変動する人間関係、共感の欠如」として特徴づけられている。

Raskin & Hall (1979) は、この自己愛人格障害の診断基準で特徴づけられる性格パターンを自己愛人格と規定して、人格障害の診断というよりむしろ自己愛的特性をどのくらいもっているかを測定するテストとして NPI を開発したのである(中西・佐方, 1986)。したがって、NPI は病的なナルシズムから正常な人格特性としてのナルシズムまでを連続的にとらえることのできるテストとして使用されている。ここから、NPI を用いた正常者のナルシズム研究も Raskin & Hall (1979) の研究以降、数多く報告されるようになってきた。それらには、NPI の因子分析と妥当性について検討したもの (Emmons, 1984, 1987 ; 大石, 1987, 1988 ; Raskin & Terry, 1988 ; 佐方, 1986, 1987 a), 自己愛の原因について検討したもの (宮下,

1991), そして不安との関係 (宮下・上地, 1985 ; 大平, 1988), 防衛反応との関係 (宮下・上地, 1985), 怒りとの関係 (大平, 1989), 他者からの独立との関係 (葛西, 1989), 依存性との関係 (小塩, 1995), 共感性との関係 (大石, 1989 ; 佐方, 1987b ; Watson, Grisham, Trotter, & Biderman, 1984), セルフ・エスティームとの関係 (Emmons, 1984 ; Kernis & Sun, 1994 ; Raskin, Novacek, & Hogan, 1991a, 1991b) などについて検討したものがある。こうした NPI を用いた研究から、ナルシズム的傾向の強い者ほど自己本位で自信家、そして社会的外向性、怒りや攻撃性、支配性が強く、さらに不安傾向や外罰的反応傾向の高いことが指摘されている。併せて、他者からの独立性は高いが共感性は欠如していることも示されている。そして、このようなナルシズムの特徴に対する評価については、男女で違いのあることも指摘されている。すなわち、男子でのナルシズムの特徴は比較的適応的なパーソナリティとして社会的に容認される傾向をもつが、女子のナルシズムの特徴は活動的ではあるが情緒不安定なところから、適応しにくいパーソナリティとして社会的に受け入れにくい傾向をもつと考えられている (小塩, 1995 ; 大石, 1987)。

永江 (1994) は、男子青年の自立を困難にしている心理機制をピーター・パン・シンドロームの観点から検討してきたが、この概念を提唱した Kiley (1983) は、その症候群の 6 つの特徴の 1 つにナルシズムをあげている。ピーター・パン・シンドロームにおけるナルシズムは、現実に対して責任をもてない、孤独で不安な自己像を覆い隠し、理想的な自己像を幻想の中に作り出してそれにしがみつき、現実から逃避しようとする心理として解釈されている。また、ナルシズムについて理論的考察を行った中西・佐方 (1986) は、青少年が示すピーター・パン・シンドローム的症狀とナルシズム的症狀が類似していることを指摘している。永江 (1994) では、男子大学生のピーター・パン・シンドローム的傾向と性役割認知との関係を検討しているが、ナルシズム的傾向と性役割認知との関係を吟味した研究はまだ報告されていない。ナルシズム的傾向の強い男女は、自己認知の側面として性役割をどのように認知しているのだろうか。例えば、ピーター・パン・シンドローム的傾向の強い男子は現実の自分の男性性は低いと認知しており、そこから彼らの性役割は男性性と女性性に差のない未分化型として特徴づけることができた (永江, 1994)。それでは、ナ

ルシズムの傾向の強い男子はこれに類似した性役割認知の型を示すのだろうか。先に指摘したナルシズムの傾向の強い者の人格特徴から考えると、その強い自己誇大感と理想化からして、彼らの性役割認知は未分化型とは異なる、むしろ明瞭で理想的なものである可能性も考えられる。

そこで本研究では、ナルシズムの傾向と性役割認知との関係を明らかにするために、大学生の男女を被験者とし、NPIによってナルシズム的人格特徴を測定し、ナルシズムの傾向の強さの程度によって、自己の性役割認知に違いがみられるかどうかを、現実自己と理想自己の側面から検討する。さらに、ナルシズムの傾向が独立意識と関係しているかどうかについても併せて検討する。

方法

被験者

調査の対象となる被験者は、福岡教育大学に在籍している240名(男子120名, 女子120名)であった。

調査の内容

調査は質問紙法によった。質問紙は、自己愛人格目録(NPI)と性役割認知測定尺度、独立意識測定尺度からなっている。以下、これらの尺度の内容について説明する。

NPI Raskin & Hall (1979) が作成したNPIをもとに、佐方(1986)が完成した日本版NPIを使用した。この尺度は、「優越性・指導性・対人影響力」因子の24項目、「自己顕示・自己耽溺」因子の15項目、「自己有能性・自信」因子の11項目から成っている(Table 1)。これらの項目はランダムな順序に配列され、それぞれ「とてもよくあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらでもない」、「ややあてはまらない」、「全くあてはまらない」の5段階尺度で評定された。ナルシズムの傾向を強く方向づけている評定に対しては5点、逆の方向づけに対しては1点を与えた。

性役割認知測定尺度 伊藤・北島(1978)が作成した性役割認知測定尺度の30項目を使用した。尺度の内訳は、「男性性」、「女性性」、「人間性」がそれぞれ10項目ずつとなっている(Table 2)。これらの項目はランダムな順序で配列され、それぞれ「あてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらともいえない」、「ややあてはまらない」、「あてはまらない」の5段階尺度で評定された。それぞれの性役割特性の認知を強く方向づけている評定に対して

Table 1 自己愛人格目録(NPI)の項目内容

因子I：優越性・指導性・対人影響力 (24項目)
私は、人気者である
私は、りっぱな人間に成長しつつある
私は、魅力のある人間である
私は、人をうまく動かせる
私には、自然に人をひきつけるものがある
私は、機知に富み、賢い
私は、尊敬されて当然の人間であると思う
私は、人から一目おかれる人間である
私は、リーダーになる才能を持っている
*私は、リーダーにふさわしい人間である
私は、いつもみんなからほめられる
私は、非凡な人間である
私は、人に対して強い影響力を持っている
私は、自分の容姿に自信をもっている
*私は、自分の能力や業績に自信をもっている
私は、どんなことでも人に信用させるのがうまい
*人は、私のいうことをよくきいてくれる
みんなが、私を友達にしたがる
私が、もしこの世の中を支配できるのなら、もっとよくなるだろう
私は、最悪の事態でも、最高の状態でいられる
*私は、人と競争して勝てる自信がある
私は、人の気持ちが手にとるようにわかる
*私は、おしゃれである
*私は、めだちたがりやである
因子II：自己顕示・自己耽溺 (15項目)
私は、できるだけ自分を売り込みたい
私は、注目的でいたいと思う
私は、うぬぼれが強い
私は、見栄はりである
私は、人の評価に敏感である
私は、権威や権力をもちたいという気持ちが強い
私は、人と競争して、相手を負かしたい
私は、自分の失敗をごまかすのがうまい
私は、鏡をながめるのが好きである
私は、おおげさに自己表現をする
*私は、おしゃれである
*私は、めだちたがりやである
私は、同じ人をほめたりけなしたり両極端である
*私は、負けるのが大嫌いである
私は、自分のために友達を利用してかまわないと思う
因子III：自己有能性・自信 (11項目)
私は、個性の強い人間である
私は、自己主張が強い
*私は、人と競争して勝てる自信がある
*私は、リーダーにふさわしい人間である
私は、あらゆることを大胆に行ないたい
*私は、自分の能力や業績に自信をもっている
私は、自分独自のやり方を通す
私は、自分で決断することを好む
*私は、リーダーになる才能をもっている
私は、負けるのが大嫌いである
*人は、私のいうことをよくきいてくれる
注) *は他因子との共通項目を示す

Table 2 性役割認知測定尺度

男性性	女性性	人間性
1. 冒険心に富んだ	11. かわいい	21. 忍耐強い
2. たくましい	12. 優雅な	22. 心の広い
3. 大胆な	13. 色気のある	23. 頭の良い
4. 指導力のある	14. 献身的な	24. 明るい
5. 信念を持った	15. 愛嬌のある	25. 暖かい
6. 頼りがいのある	16. 言葉使いの丁寧な	26. 誠実な
7. 行動力のある	17. 繊細な	27. 健康な
8. 自己主張のできる	18. 従順な	28. 率直な
9. 意志の強い	19. 静かな	29. 自分の生き方のある
10. 決断力のある	20. おしゃれな	30. 視野の広い

は5点、逆の方向づけに対しては1点を与えた。性役割認知尺度では、(a) 現実自己と (b) 理想自己の視点から、それぞれ評定することを求めた。

独立意識測定尺度 加藤・高木 (1980) が作成した独立意識測定尺度の20項目を使用した。尺度の内訳は、「自己の独立性」10項目、「親への依存性」5項目、「反抗・内的混乱」5項目から成っている (Table 3)。これらの項目はランダムな順序で配列され、それぞれ「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらでもない」、「ややあてはまらない」、「非常にあてはまらない」の5段階尺度で評定された。それぞれの特性を強く方向づけている評定に対して5点、逆の方向づけに対しては1点を与えた。

調査の手続き

調査は、調査者が被験者に直接内容を説明し、回収する方法をとった。教示は次のように行った。「質問紙は3種類あります。第1の質問紙は、あなたの自己に対する意識についてお聞きするものです。それぞれの項目がどれだけ自分にあてはまるかを考えて評定して下さい。第2の質問紙は、性役割すなわち男らしさ、女らしさについてあなたの考えをお聞きするものです。それぞれの項目が、(a) 現実の自己にどれだけあてはまると思うか、(b) 理想的な自己にどれだけあてはまると思うか、を判断して評定して下さい。第3の質問紙はあなた自身の独立意識についてお聞きするものです。それぞれの項目がどれだけ自分にあてはまるかを考えて評定して下さい。」

調査の時期

調査は、1995年12月初旬に実施した。

Table 3 独立意識測定尺度

自己の独立性
1. 自分の人生を自分で築いていく自信がある
2. 自分自身の判断に責任をもって行動することができる
3. 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる
4. 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている
5. まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる
6. 社会の中で自分の果たすべき役割があると思う
7. 自分の考えが変わりやすく自信がもてない
8. 自分のほんとうにやりたいことが何なのかわからない
9. たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひげめを感じることはない
10. 小さなことでも、自分で決断することができない
親への依存性
11. 親といるだけで何となく安心できる
12. 困ったときは親に頼りたくなる
13. 親は自分の心の支えである
14. 何かする時には、親にはげましてもらいたい
15. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている
反抗・内的混乱
16. 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い
17. 親や先生の言うことには、たとえ正しくても反対したくなる
18. 大人に対してひげめを感じる人が多い
19. 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない
20. 親に対して自分の意見を主張したいが、自信がもてない

結 果

NPIの分析

男女のNPI得点の平均値は、男子で2.93 (SD=.55)、女子で2.81 (SD=.50) であり、男子の得点が高い傾向を示した ($t_{(238)}=1.78, p<.10$)。下位因子では、「優越性・指導性・対人影響力」因子および「自己有能性・自信」因子でそれぞれ男子が女子より得点が高かった ($t_{(238)}=1.94, p<.10$; $t_{(238)}=2.23, p<.05$)。「自己顕示・自己耽溺」因子では男女差はみられなかった。

次に、男女それぞれNPI得点の平均値から $\frac{1}{2}$ SD以上得点の高い被験者から上位30名をNPI上位群、 $\frac{1}{2}$ SD以上得点の低い被験者から下位30名をNPI下位群、そしてこれら2群の間得点の被験者30

Table 4 男女のNPI強度別得点

	上位群	中位群	下位群
男子	3.64	2.93	2.24
女子	3.43	2.79	2.17

名をNPI中位群として抽出した。男女それぞれ3群のNPI得点の平均値を示したものが、Table 4である。この資料に対して、性×NPI強度の2要因の分散分析を行った結果は次のとおりである。主効果として、男子が女子より得点が高く ($F_{(1,174)} = 15.57, p < .01$)、NPI上位群、中位群、下位群の順で得点が高かった ($F_{(2,174)} = 495.18, p < .01$)。性×NPI強度の交互作用は有意でなかった。

NPI強度と性役割認知

NPI強度別に性役割認知測定尺度の結果を、現実自己と理想自己ごとに示したものがTable 5である。男性性、女性性、人間性の性役割特性ごとに性×NPI強度×性役割評価の3要因の分散分析を行った結果は、次のとおりである。

男性性得点の分析 Table 5の男性性得点に対する分析の結果、性に有意差がみられ ($F_{(1,174)} = 14.74, p < .01$)、男子が女子より有意に高く男性性を評価していた。NPI強度に有意差がみられ ($F_{(2,174)} = 68.62, p < .01$)、NPI上位群、中位群、下位群の順に男性性を有意に高く評価していた。性役割評価に有意差がみられ ($F_{(1,174)} = 677.76, p < .01$)、理想自己の男性性が現実自己のそれより高く評価されていた。NPI強度×性役割評価の交互作用が有意であった ($F_{(2,174)} = 39.06, p < .01$)。これは、理想自己の男性性がNPI強度によって差がないのに対し、現実自己の男性性はNPI上位群、中位群、下位群の順に高くなっていること

による。その他の交互作用は有意ではなかった。

女性性得点の分析 Table 5の女性性得点に対する分析の結果、性に有意差がみられ ($F_{(1,174)} = 8.54, p < .01$)、女子が男子より有意に高く女性性を評価していた。NPI強度に有意差がみられ ($F_{(2,174)} = 15.34, p < .01$)、NPI上位群、中位群、下位群の順に女性性を有意に高く評価していた。性役割評価に有意差がみられ ($F_{(1,174)} = 515.65, p < .01$)、理想自己の女性性が現実自己のそれより高く評価されていた。NPI強度×性役割評価の交互作用が有意であった ($F_{(2,174)} = 5.91, p < .01$)。これは、理想自己の女性性がNPI強度によって差がないのに対し、現実自己の女性性はNPI上位群、中位群、下位群の順に高くなっていることによる。性×性役割評価の交互作用も有意であった ($F_{(1,174)} = 16.60, p < .01$)。これは、現実自己の女性性に男女差はないが、理想自己の女性性は女子が男子より高く評価していることによる。性×NPI強度×性役割評価の交互作用が有意な傾向を示した ($F_{(2,174)} = 2.80, p < .10$)。これは、先のNPI強度×性役割評価の交互作用が男子より女子により顕著にみられることによっている。

人間性得点の分析 Table 5の人間性得点に対する分析の結果、NPI強度に有意差がみられ ($F_{(2,174)} = 29.98, p < .01$)、NPI上位群、中位群、下位群の順に人間性を有意に高く評価していた。性役割評価に有意差がみられ ($F_{(1,174)} = 790.15, p < .01$)、理想自己の人間性が現実自己のそれより高く評価されていた。性の主効果は有意でなく、男子も女子も同じ程度に高く人間性を評価していた。NPI強度×性役割評価の交互作用が有意であった ($F_{(2,174)} = 19.48, p < .01$)。これは、理想自己の人間性がNPI強度によって差がないのに対し、現実自己の人間性はNPI上位群、中位群、下位群の順に高くなっていることによる。性×NPI強度の交互作用が有意であった ($F_{(2,174)} = 3.00, p < .$

Table 5 男女のNPI強度・性役割評価・性役割特性別の性役割認知得点

	男子						女子					
	上位群		中位群		下位群		上位群		中位群		下位群	
	現実	理想	現実	理想	現実	理想	現実	理想	現実	理想	現実	理想
男性性	5.34	6.35	4.28	5.81	3.21	5.80	4.88	5.90	4.02	5.56	3.13	5.27
女性性	3.95	4.87	3.79	4.60	3.26	4.40	4.23	5.24	3.71	5.18	3.24	4.89
人間性	5.19	6.30	4.54	5.98	3.84	5.88	4.84	6.03	4.58	6.02	4.00	5.90

Table 6 男女のNPI強度別独立意識得点

独立意識	男 子			女 子		
	上位群	中位群	下位群	上位群	中位群	下位群
自己の独立性	4.15	3.63	3.20	3.89	3.52	3.10
親への依存性	2.73	2.61	2.65	3.20	3.10	3.30
反抗・内的混乱	2.24	2.52	2.67	2.27	2.20	2.45

05)。これは、NPI上位群では人間性について男子が女子より有意に高く評価しているのに対し、中位群と下位群では男女差がないことによっている。

NPI強度と独立意識

NPI強度別に独立意識測定尺度の結果を示したものが、Table 6である。この資料に対して、独立意識測定尺度の3つの下位カテゴリー別に、それぞれ性×NPI強度の2要因の分散分析を行った結果は、次のとおりである。まず、自己の独立性得点についてはNPI強度で有意差がみられた($F_{(2,174)}=35.60, p<.01$)。NPI上位群、中位群、下位群の順に有意に自己の独立性得点が高かった。性差はみられなかったが、男子が女子より高い傾向を示した($F_{(1,174)}=3.37, p<.10$)。交互作用は有意でなかった。次に、親への依存性については性差がみられ($F_{(1,174)}=19.52, p<.01$)、女子が男子より有意に得点が高かった。しかし、NPI強度の主効果および交互作用は有意でなかった。さらに、反抗・内的混乱についてはNPI強度で有意差の傾向がみられ($F_{(2,174)}=2.77, p<.10$)、NPI下位群が中位群、上位群より得点が高かったが、中位群と上位群間には差がみられなかった。性の主効果および交互作用は有意でなかった。

考 察

本研究の主要な結果は、次のとおりである。

(1) 男女ともナルシズム的傾向の強い者ほど男性性を高く評価しており、それは理想自己より現実自己でより顕著であった。(2)ナルシズム的傾向の強い者ほど女性性も高く評価しているが、それは女子でより高かった。(3)男女ともナルシズム的傾向の強い者ほど人間性を高く評価しており、それは理想自己より現実自己でより顕著であった。(4)男女ともナルシズム的傾向の強い者ほど自己の独立性が高く、反抗・内的混乱は少なかったが、親への依存性は他の群と差はみられなかった。

ナルシズム的傾向と性役割認知との関係について、まず考察してみたい。男女ともNPI上位群は中位群、下位群に比べると、自らの男性性、女性性、人間性の性役割特性が高いと認知している。これからみると、男女とも男性性、女性性ともに高い、いわゆる両性具有型の性役割特性をもっていることと認知していることがわかる。この結果は、現実自己評価においてより顕著に現われており、理想自己評価ではみられていない。このことは、自己の性役割イメージとして上位群は理想自己と現実自己の差が小さく、現実の性役割イメージは理想の性役割イメージにかなり近いことを示唆している。一方、中位群、下位群では理想は理想として、現実とは違った性役割イメージを自らのものとして認知しているといえる。ところで、永江(1994)のピーター・パン・シンドロームと性役割認知との関係についての研究では、ピーター・パン・シンドローム的傾向の強い男子は自らの男性性が低いという認知から、男性性と女性性に差のない未分化型の性役割認知をもち、この傾向の弱い男子は自らの男性性が高いという認知から、男性性を女性性より明らかに高く評価する男性性優位型の性役割認知をもっていることが報告されている。これからみると、NPI下位群の男子の性役割認知は、ピーター・パン・シンドローム的傾向の強い男子の未分化型の性役割認知に似ているが、上位群の男子の性役割認知は、ピーター・パン・シンドローム的傾向の弱い男子の男性性優位型の性役割認知と同一のものではないといえる。ここから、性役割認知の側面からみて強いナルシズム的傾向は少なくとも強いピーター・パン・シンドローム的傾向とは異なるものであるといえるだろう。

Bem(1975)によれば、高い男性性と女性性をあわせもつ両性具有型の性役割は精神的健康と正の相関をもつこと、またSpence, Helmreich, & Stapp(1975)によれば男性性も女性性もともに低い未分化型の性役割は低いセルフ・エスティーム

と関係していることが示されている。これらの研究から解釈すれば、本研究の男女における強いナルシズムの傾向は両性具有型の性役割と関係し、弱いナルシズムの傾向は未分化型の性役割と関係しており、そこから前者は高い精神的健康と後者は低いセルフ・エスティームと、それぞれ関係が深いといえるかもしれない。しかし、果してそうだろうか。ナルシズムの人格は、その肥大した自己への誇大感と理想化によって特徴づけられる。強いナルシズム的傾向をもつ男女は、自らの性役割として「指導力のある」、「行動力のある」、「意志の強い」といった男性特性に、「かわいい」、「従順な」、「おしゃれな」といった女性特性を合わせもち、さらに「自分の生き方のある」、「心の広い」、「明るい」といった人間性特性をもっていると認知している。しかも、この認知は理想自己としてだけでなく、現実自己としても強くもたれているのである。こうした男性性、女性性、そして人間性の性役割特性を現実自己として十全にもっていると認知するナルシズム的傾向の強い男女は、理想的な性役割認知を形成しているといえるだろう。ただ、同性役割だけでなく異性役割も現実自己として高く獲得し、さらに両性に共通する役割をも獲得しているという超性役割型の認知が現実のものであるかどうかは、彼らの性役割行動と実際に対照させて評価しなければならない問題である。しかしながら、強いナルシズム的傾向をもつ者は、男女をとわず理想的な性役割イメージを現実自己として認知していることは明らかである。そしてこのことは、独立意識の中にもはっきりと現われている。

そこで次に、ナルシズム的傾向と独立意識との関係について考察する。男女ともNPI上位群は中位群、下位群に比べると、「自己の独立性」が高く、「反抗・内的混乱」は小さいが、「親への依存性」は変わらないという独立意識の特徴を示している。これからみると、強いナルシズム的傾向をもつ者は一般に独立意識が高いといえるだろう。すなわち、彼らは人生に対して意欲的で活動的な自己像をもち、主体的で社会性をもった生き方をめざそうとする意識が強いのである。これは、ナルシズム的傾向の強さが他者からの独立性の高

さと関係していることを示した葛西（1989）の結果とも一致している。また、永江（1994）は強いピーター・パン・シンドローム的傾向が低い独立意識と関係していることを示しているが、この点からみても強いナルシズム的傾向は強いピーター・パン・シンドローム的傾向とは異なるものであるといえるだろう。独立意識の内容からみても、強いナルシズム的傾向をもつ男女は理想的な自己認知をしているといえる。この結果も、自己の誇大感と理想化というナルシズム的人格特徴から、先と同様に解釈することができるだろう。

以上の議論から、本研究において測定された大学生のナルシズム的傾向は、性役割認知からみてもあるいは独立意識からみても、その積極的、主体的側面と結びついており、したがってそれは少なくとも病的なナルシズムというより健康的なナルシズムにかかわっているものとみなされるだろう。小此木（1981）は、「どんな人間であろうと、自信と希望、能力と達成の感覚、野心と理想といった、生きていく上でのエネルギー源としての自己愛は、必要・必須なものである」と指摘しているが、これは正常人におけるナルシズムの健康的な側面を強調したものと見える。本研究におけるナルシズム的傾向の強い者は、まずこの健康的なナルシズムの範囲に入るものと解釈することができるだろう。ただこれまでに考察してきたように、自らの性役割として高い男性性と女性性を獲得し、さらに高い人間性をも獲得しているという認知をもっている彼ら、そして高い独立心と他者に対する低い反抗心および少ない内的混乱しかもたず、依存性は低いと認知している彼ら、これは青年後期にある大学生の自己認知としては、あまりにもできすぎではないだろうか。そこには適度というよりやや肥大した自己への誇大感と理想化というナルシズム的人格特徴の影響が、性役割認知と独立意識の中に現われているといえるのではないか。一見、健康的にみえる自己認知の中にナルシズムの本質の特徴が作用しているとみることができ、したがってその認知が現実の自己に合致するものであるかどうかは、また別の問題であるといえるだろう。

引用文献

- Ashby, H. U., Lee, R. R., & Duke, E. H. 1979 A narcissistic personality disorder MMPI scale. *Paper presented at the meeting of the American Psychological Association, New York.*
- Bem, S. L. 1975 Androgyny vs. the tight little lives of fluffy women and chesty men. *Psychology*

- Today, 9, 58-62.
- Ellis, H. 1898 Autoerotism : A psychological study. *Alienist and Neurologist*, 19, 260-299.
- Emmons, R. A. 1984 Factor analysis and construct validity of the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 291-300.
- Emmons, R. A. 1987 Narcissism : Theory and measurement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 11-17.
- Exner, J. E. 1969 Rorschach responses as an index of narcissism. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 33, 324-330.
- Freud, S. 1914 On narcissism : An introduction. In J. Strachey (Ed. and Trans.), 1957 *The standard edition of the complete psychological works of Sigmund Freud (Vol. 14)*. London: Hogarth Press, Pp.73-102.
- 福島 章 1986 自己愛人格障害 臨床精神医学, 15, 187-193.
- 福島 章 1992 青年期の心—精神医学からみた若者 講談社
- Grayden, C. 1958 The relationship between neurotic hypochondriasis and three personality variables : Feeling of being unloved, narcissism, and guilt feelings. *Dissertation Abstracts International*, 18, 2209-2210.
- Harder, D. W. 1979 The assessment of ambitious-narcissistic character style with three projective tests : The early memories, TAT, and Rorschach. *Journal of Personality Assessment*, 43, 23-32.
- 伊藤祐子・北島順子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 上地雄一郎・宮下一博 1992a 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観 [1] 岡山県立短期大学研究紀要, 37, 107-117.
- 上地雄一郎・宮下一博 1992b 自己愛の発達と障害およびその測定に関する研究の概観 [2] 岡山県立短期大学研究紀要, 37, 118-127.
- 葛西真記子 1989 Narcissistic Personalityにおける対人関係 (1) 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 235.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 72-76.
- Kernberg, O. 1975 *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jason Aronson.
- Kernberg, O. 1980 *Internal world and external reality*. New York: Jason Aronson.
- Kernis, M. H., & Sun, C. 1944 Narcissism and reactions to interpersonal feedback. *Journal of Research in Personality*, 28, 4-13.
- Kiley, D. 1983 *The Peter Pan syndrome : Men who have never grown up*. New York: Dodd, Mead & Company. 小此木啓吾 (訳) 1984 ピーター・パン・シンドローム—なぜ、彼らは大人になれないのか 詳伝社
- Kohut, H. 1971 *The analysis of the self*. New York: International University Press.
- Kohut, H. 1976 *The restoration of the self*. New York: International University Press.
- 小塩真司 1995 自己愛的性格傾向と依存性—青年男子を対象として 教育心理学論集 : 名古屋大学大学院教育学研究科, 25, 23-36.
- Lasch, C. 1979 *The culture of narcissism*. New York: W. W. Norton. 石川弘義 1981 ナルシシズムの時代 ナツメ社
- Lowen, A. 1985 *Narcissism : Denial of the true self*. New York: Macmillan Publishing Company. 森下伸也 (訳) 1990 ナルシシズムという病い—文化・心理・身体の病理 新曜社
- 宮下一博 1991 青年期におけるナルシシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 455-460.
- 宮下一博・上地雄一郎 1985 青年期におけるナルシシズム (自己愛) 的傾向に関する実証的研究 (1) 総合保健科学 : 広島大学保健管理センター研究論文集, 1, 51-61.
- 永江誠司 1994 青年期の自立にかかわる諸問題 (2)—ピーター・パン・シンドロームと男性の自立 福岡教育大学紀要, 43, 313-322.

- 中西信男 1987 ナルシシズム—天才と狂気の心理学 講談社
- 中西信男・佐方哲彦 1986 ナルシシズム時代の人間学—自己心理学入門 福村出版
- 大平英樹 1988 自己愛人格と不安の関係—自己愛人格目録(NPI)の検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, 110.
- 大平英樹 1989 自己愛人格における怒りの感情と攻撃的行動—生理的喚起の促進作用に着目して 日本心理学会第53回大会発表論文集, 154.
- 大石史博 1987 ナルシシズム的人格に関する研究(2)—YG性格検査との関係について 日本心理学会第51回大会発表論文集, 535.
- 大石史博 1988 ナルシシズム的人格に関する研究(3)—CMI, MMPIとの関係 日本心理学会第52回大会発表論文集, 109.
- 大石史博 1989 ナルシシズム的人格に関する研究(4)—共感性との関係について 日本心理学会第53回大会発表論文集, 155.
- 小此木啓吾 1981 自己愛人間—現代ナルシシズム論 朝日出版社
- Raskin, R., & Hall, C. S. 1979 A Narcissistic Personality Inventory. *Psychological Report*, 46, 55-60.
- Raskin, R., & Terry, H. 1988 A principal-components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 890-902.
- Raskin, R., Novacek, J., & Hogan, R. 1991a Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality*, 59, 19-38.
- Raskin, R., Novacek, J., & Hogan, R. 1991b Narcissistic self-esteem regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 911-918.
- 佐方哲彦 1986 自己愛人格の心理測定—自己愛人格目録(NPI)の開発 和歌山県立医科大学進学課程紀要, 16, 77-86.
- 佐方哲彦 1987a 自己愛人格目録(NPI)の妥当性に関する研究—YG検査およびMPI, MMPIとの相関から 日本教育心理学会第29回総会発表論文集, 538-539.
- 佐方哲彦 1987b 自己愛人格と共感性との関連 和歌山県立医科大学進学課程紀要, 17, 67-75.
- Spence, J. T., Helmreich, R., & Stapp, J. 1975 Rating of self and peer on sex role attributes and their relation to self-esteem and conception of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 29-39.
- Watson, P. J., Grisham, S. O., Trotter, M. V., & Biderman, M. D. 1984 Narcissism and empathy: Validity evidence for the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 301-305.